

登壇者プロフィール

田中美保子(たなか・みほこ)

東京女子大学現代教養学部教授。翻訳学、現代イギリス児童文学研究。著書に *Aspects of the Translation and Reception of British Children's Fantasy Literature in Postwar Japan* (音羽書房鶴見書店, 2009)、共編著書に *Lucy Boston: An Artist in Everything She Did* (Oldknow Books, 2021)、論文に「宮崎駿『千と千尋の神隠し』のアメリカにおける受容」(『東京女子大学比較文化研究所紀要』2018) など。

安藤聡(あんどう・さとし)

明治学院大学文学部英文学科教授。主著『ファンタジーと英国文化』、『ファンタジーと歴史的危機』、『ナルニア国物語 解説』、『英国庭園を読む』(以上、彩流社)、『英国ファンタジーの風景』(日本経済評論社)。

福田二郎(ふくだ・じろう)

駿河台大学法学部教授。英文学、児童文学研究。著書に『アルプスの少女ハイジの文化史』(国文社、2010年)、『ローラとアンの子育て物語』(音羽書房鶴見書店、2022年)。

土居伸彰(どい・のぶあき)

ひろしま国際平和文化祭メディア芸術部門プロデューサー。2015年に株式会社ニューディアーを立ち上げ、プロデュース、映画祭、配給、執筆等を通じて、世界のアニメーション作品を紹介する。著書に『私たちにはわかってる。アニメーションが世界で最も重要だって』(青土社)ほか、プロデュース作品に『不安な体』(2021年/水尻自子監督)、『半島の鳥』(2022年/和田淳監督)など。

奥畑豊(おくはた・ゆたか)

日本女子大学文学部英文学科専任講師。イギリスを中心とした英語圏の現代文学。著書に *Angela Carter's Critique of Her Contemporary World: Politics, History, and Mortality* (Peter Lang, 2021)、『ハロルド・ピンター: 不条理演劇と記憶の政治学』(彩流社, 2021)、『ビッグ・ブラザーの世紀: 英語圏における独裁者小説の系譜学』(小鳥遊書房, 2021)がある。

浜崎史葉(はまさき・ふみな)

PhD, 東京大学ほか非常勤講師。主に1960年代から70年代のフェミニズムの思想、哲学、文学、そして視覚芸術の領域横断的研究を行う。「動物」、「女性」、「食物」、「消費」、「(再)生産」、「主体」をキーワードに、フェミニズムにおけるそれらの表象のポリティクス、攪乱可能性、問題点を考察している。

中村麻美(なかむら・あさみ)

立教大学文学部文学科英米文学専修助教。英文学、ユートピア・ディストピア文学。主要論文“On the Uses of Nostalgia in Kazuo Ishiguro's *Never Let Me Go*” (*Science Fiction Studies*)。「家長制批判としての『一九八四年』?」(『ジョージ・オーウェル『一九八四年』を読む——ディストピアからポスト・トゥルースまで)。

Translation Adaptation Intertextuality

時代を映すアダプテーション



日時: 2022年3月21日(月・祝) 13:00-17:30

開催: Zoom

プログラム

13:00-開会の辞

13:05-14:35 シンポジウム第1部

田中美保子「選択と断念のはざまから——Philippa Pearce, *Tom's Midnight Garden*の翻案を手がかりに考える」

翻案(アダプテーション)は翻訳という行為の中でも最も原作／原文から離れた訳出形態である。しかし、他者の創った原作／原文に基づいた営みである、という点でまぎれもなく「翻訳」の一形態である。本発表では、翻訳学理論でよく用いられる「等価」という概念に基づき、「選択」と「断念」(loss and gain)という二つの軸から、翻案(アダプテーション)について考える。題材としてとりあげるのは、戦後イギリス児童文学の金字塔と言われる Philippa Pearce, *Tom's Midnight Garden* (1958)と、その翻案作品6種類(映画2、舞台3、グラフィックノベル1)である。これらの作品では、翻案に際し、何が選択され、何が断念されたのか。そのはざまから立ち上ってくるものを捉えてみたい。

安藤聡「『床下の小人たち』と『借りぐらしのアリエッティ』——不安な時代を生き抜く「滅び行くものたち」

ベッドフォードシャー州の古い屋敷とその周辺の田園を舞台にしたメアリー・ノートンの『床下の小人たち』シリーズ(特に第一巻)を映画化したジブリ映画『借りぐらしのアリエッティ』は、東京郊外(小金井界隈)の古い屋敷とその庭に舞台を移している、プロットも大幅に変更されている。だが、不安な時代を生き抜く「滅び行くものたち」という最も重要な主題はまったく損なわれていない。本発表ではこのことを、原作と映画のいくつかの要素を比較しつつ確認したい。

福田二郎「『大草原の小さな家』: 自伝から小説、テレビドラマへのアダプテーション」

『開拓の少女』(草稿が編集されて、2014年に出版)として執筆されたローラ・インガルス・ワイルダーの自伝形式の作品は、当初出版社に却下されたが、その後、娘のローズの助力によって小説として改編され、8冊の「小さな家」シリーズ(1932-1943)となるベストセラーとなった。その物語をベースにしたマイケル・ランドン監督・主演によるテレビドラマ『大草原の小さな家』シリーズ(1974-83)は、世界中で放映される人気を博した。本発表では、自伝から小説、テレビドラマへのアダプテーションの特徴を考察する。

14:45-15:45 特別講演

土居伸彰「文学作品はアニメーションに翻案しうるのか？いくつかの具体的な実践例から考える」

「文学作品をアニメーションに翻案する」とはどういうことなのか？果たしてそれは可能なのか？ニコライ・ゴゴリ『外套』のアニメーション化に取り組みつづけるユーリー・ノルシュテインの考えの紹介からスタートし、発表者がプロデューサーとして企画開発や制作に関わるアニメーション作品を例として挙げながら、個人アニメーション作家がいかに原作を「誤読」しながら企画を開発し、制作し、そして(幸運であれば)完成にまでたどり着くのか、実践者(もしくは傍観者)の立場から、そのプロセスについて考えていく。なお、発表にあたっては、具体的な実践例として、文学テキストの「文字」をアニメーションにする作風の折笠良監督が制作中の短編アニメーション『Emergences』(アンリ・ミショー「みじめな奇蹟」原作)や、既に無数に翻案されている原作に取り組む水江未来監督の企画開発中の長編『水江西遊記(仮)』などを取り上げる。

16:00-17:30 シンポジウム第2部

奥畑豊「核表象のピクチャレスク性を巡って——ネヴィル・シュート『渚にて』とその映画アダプテーション」

キューバ危機の前後には架空の第三次世界大戦を描いた小説が量産されたが、その中でもネヴィル・シュートの『渚にて』(1957)は核によるカタストロフィを想像的に描いた作品としては最大の成功を収めた。こうした一般的人気のため、この小説はこれまで二度にわたり映画化されている。アメリカ人監督スタンリー・クレイマーによる1959年の最初の翻案は興行的には期待外れだったものの、冷戦期「アトミック・ボム・シネマ」の代表作とみなされるに至った。その後、2000年にはオーストラリア人のラッセル・マルケイ監督によって、『渚にて』はテレビ映画として新たにリメイクされた。本発表は核の犠牲者たちの(非)表象に関する問題に焦点を合わせつつ、シュートのテキストとそれに対する二つのアダプテーションを分析する。これらの映画版が、原作の孕む一種の「ピクチャレスク性」とでも言うべき側面に対していかに応答したのかを素描することがこの発表の目的である。

浜崎史菜「フェミニスト・アクティヴィズムにおける「動物」表象のアダプテーションとポリティクス」

本発表では、1960-70年代のフェミニスト・アクティヴィズムにおける「動物」の表象および「動物」をめぐる言説の使用を巡る政治を取り上げる。1968年のミスアメリカプロテストでは、様々な戦略的デモンストレーションが行われた。特に動物の言説・表象を用いたものとして、ミスアメリカコンテストを「牛のオークション」に喩えたプラカードが使用されたこと、「ミスアメリカ」と称された羊が歩いたことが写真資料等から知られている。これらの「動物」の言説・表象からは、女性を“動物化”された商品ではなく“人間”として扱うことを要求するメッセージが読み取れる。しかし、このメッセージは、同時に、「動物」に対する男性中心主義的あるいは人間中心主義的な眼差しを暗に補強してしまう危険性を持つものではないだろうか。フェミニスト・アクティヴィズムがいかに「動物」をめぐる言説を“アダプト”し、そこにはどのような攪乱可能性と限界があるのかを検証する。

中村麻美「TVドラマ『ハンドメイド・テイル/侍女の物語』における共感(エンパシー)の諸問題」

1985年に出版された『侍女の物語』は2017年にテレビドラマ化され、#MeToo運動の高まりを背景に、一気に注目を集めた。2022年現在、シーズン5の制作も決定している。小説版は近未来アメリカで性奴隷として搾取される主人公が脱出を試みる時点で終わるのに対し、ドラマ版はその後の主人公を待ちかまえる試練の数々を敷衍していく。TVドラマ版は新キャラクターやバックストーリーを追加することで、様々な視点から生殖至上主義に対して警鐘を鳴らす。一方、とめどない拷問や復讐のシーンの数々は物語をスペクタクルとして消費することを促し、オーディエンスの感覚を麻痺させる側面もあるだろう。今回の発表は共感(エンパシー)というテーマを通して、『侍女の物語』のTVアダプテーションを鑑賞することとはどういったことなのか、という問題を検討する。